平成１６年９月１日発行

かまにし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第１３号

わがまちの顔

二胡演奏者　中西桐子さん

今年の四月、大田区子どもガーデンパーティー矢口小学校会場で、珍しい二胡の演奏をしていた少女の姿を目に留めた方は多いのでは。十三歳の二胡演奏家、中西桐子さんは、蓮沼中学校に在学中です。

二胡とは、日本の胡弓に似た弦楽器で、錦蛇の皮を張った琴胴と木製の琴竿に沿って金属製の弦が二本張ってあります。弦と弦の間には馬の尻尾の毛で出来た弓を挟み込み、内弦、外弦をこすって音を出します。現在、日本では二胡と胡弓の区別が曖昧で、プロの演奏家ですら胡弓と呼んでいる人もいます。胡弓は日本古来の楽器で、弦は三本、形も音色も奏法も成り立ちも大きく違うものです。

さて桐子さんが、ご両親と一緒に二胡を習い始めたのは六歳の時でした。好きこそ物の上手の喩え通り、今では実力もご両親を遥かに超え、毎月一回、東大井までレッスンに通い、家での練習は一日四時間づつ、早朝と下校後に毎日欠かしたことは無いという努力家です。

二〇〇三年北京で開催された国際二胡コンクール、アマチュア少年の部に出場、準決勝まで勝ち進むことが出来ました。中国の人達と日本人の二胡に対するというより、楽器や音楽と向き合う姿勢に大きな違いがある事に気が付きました。中国の人達は、プロになるために必死で取り組んでいるのです。みんな生活がかかっています。刺激とショックを受けた桐子さんも帰国後は気持ちを入れ替えると同時に、一つの大きな壁を乗り越えることが出来たように感じました。二〇〇三年八月には、「キリコ・ファースト・ミニライブ」を開き大成功を収め、東京ＦＭネクスト・スーパープレーヤーズでは、見事グランプリを獲得しました。十月の御会式ライブ、十一月にはアプリコで薬物乱用防止キャンペーンと出演依頼も増えてきました。

今年の七月には、再度北京のコンクールに挑戦、八月三十日には区民プラザ小ホールにてコンサートの開催が決定しました。

「どんな楽器でも同じで、何よりも大切なのは、心で奏でること。そしてその感情が表現できれば。その理屈もよく解るし、口で言うのも簡単です。しかし、それが難しく簡単なことではありません。まだまだ勉強です。」と最後に語ってくれました。

桐子さんをここまで育て上げたのは、言うまでもなくお母さんの大きな力だと思います。立派な二胡演奏家にと願いながら二人三脚で頑張って来られたのです。好きなことに充分に打ち込めること。それを支えてくれるお母さんの想い、久し振りに爽やかな親子に出会いました。

（取材　山崎、石渡委員）

特集『多摩川そのⅣ』

消えゆく筏道

多摩川の筏流し

お江戸が焼けて　山栄ゆ
杉丸太　ヤンソレ　樅　栗
角の値のよさ
（檜原村民謡）

徳川家康が江戸に入り、江戸城の修築、市街地の建設が進むと、江戸の人口はみるみる膨張して建築資材の需要は増大の一途をたどりますが、それに拍車をかけたのが頻発する火災でした。青梅材は地の利を生かして、比較的廉価な建築用材を手っ取り早く供給するという役割を果たしていました。青梅材は杉檜を中心とした小角、小丸太がほとんどで、それを「川下げ」する筏に大別して、長杉筏と角筏の二種類がありました。

多摩川の筏流しの起源については明らかでありませんが、おそらくは江戸初期に始まり、中期以降主として行われ、幕末から明治三十年代にかけて最盛期を迎えたもので、大正末年に終わりを告げております。その間およそ三百年、それは多摩川の風物詩として、あるいは絵師の筆にのぼり、あるいは詩歌に詠まれて、人々に親しまれてきました。鉄道もトラックの便もない当時としては、大量の木材を輸送する唯一の手段であったわけです。筏の終着駅は河口に近い六郷で、そこからは筏宿の手で船積みにされ、船積みできない大材は引筏で、主として本所、深川などの材木問屋へ搬送されて行きました。

大田区内の筏道

最終地に着いた筏乗りたちは、六郷の筏宿に荷を引き渡すと、その晩は六郷か川崎に泊まり翌朝早く起きて帰路に着きました。多摩川沿いにさかのぼって、六郷から沢井まで約十六里（六十四キロ）、鉄道のない時代には途中、調布か府中で一泊する二日がかりの行程でした。もっとも急ぎのときは、午前三時ごろ出発し、ぶっとおしに歩いて、青梅の町で夕食をとり、夜の十時ごろ、家に着くこともあったということで、むかしの人の健脚ぶりがしのばれます。

しかし、明治二十七年、立川から先に青梅鉄道が敷かれてからは、途中で泊まるようなことは少なくなったようです。したがって、筏乗りたちがもっぱら筏道を歩いたのは、大正中期までだったと考えられます。

それでは、大田区内の筏道は、どういうルートを辿っていたのでしょうか。

六郷から土手づたいに歩いて、古川薬師の横を過ぎ、多摩川大橋（矢口の渡しがあった）のそばの東八幡神社のところから土手を下りて右手に曲がります。古川薬師の少し上手にあった原河岸は、多摩川砂利の採集地として知られ、数多くの砂利船が舫っていて、筏乗りとの間にしばしば紛争の生じた所です。それから新田神社のすぐ前を通り、東急多摩川線（大正十二年開通）の線路を横切って、頓兵衛地蔵の前に出ます。この道は、鎌倉に通ずる中世からの古道で、以前はその南側に古多摩川の流路の跡がはっきりと認められました。しばらく進むと下丸子駅の少し北寄りのところで、六郷用水に突き当たります。正面にあった橋を下郷橋といい、その角に「おかつみせ」という茶屋がありました。なんでも「おかつ」という綺麗な娘がいたとかで、六郷を発った筏乗りが最初に足を休めた場所です。

それから筏道は、六郷用水沿いに左に折れ、鵜の木の光明寺の裏手を通って西に進み、正善寺前の護摩堂橋に出ます。この付近の六郷用水は、台地を横切る難工事であったため、女まで狩り出して、掘り進んだというので「女掘」とも呼ばれています。かつては、深い切り通しの底を真っ青な水が勢いよく流れていましたが、今は平凡な緑の遊歩道となってしまいました。筏道は、さらに六郷用水に沿って、沼部の光蔵院の前を過ぎ、新幹線のガードをくぐって浅間神社の下へと進み、その後は二子の行善寺まで丸子川沿いの道をひたすら遡ります。

世田谷区内の筏道

浅間神社から行善寺下までの筏道の右手は久が原の丘陵で、覆い被さるような樹木が繁り、左手は一面の田んぼで、夕暮れともなれば人っ子一人通らない寂しい道でした。

矢沢川が六郷用水の下をくぐって多摩川に注ぐ地点を過ぎて、少し行くと左側に甚蔵店、ちょっと離れて玉川屋という小さな茶宿があり、茶乗りの中にはそこで一服する者もいました。以前の地蔵店は旧道にあり、大きな茶宿で川下げの途中で茶乗りがよく泊まったところでした。ここは茶道と江戸道が交わる地点で、二子の渡し場へも通じており、ここに水難地蔵尊があったことから地蔵店の屋号が生まれたと言います。

地蔵店からは、東急田園都市線のガードをくぐり、今度は野川沿いの道を辿って行きます。当時の二子橋付近には、十数軒の料亭が建ち並び、東京郊外の遊楽地として賑わいをみせていました。野川に架かる鎌田橋のところから斜め北に向い、大蔵六丁目の永安寺前を左折、多摩堤通りを通って、バス停「下宿」から左手に入り、砧第四出張所の先で水道道路を横切って、北見五丁目の知行院の前に出ます。

茶道は知行院前からほぼ真っ直ぐに西進して、六郷用水の二の橋にぶつかります。かつては喜多見村のメインストリートであったこの道が世田谷通りに突き当たる手前の三叉路に小さな祠があり、その傍らに高さ一メートル半位の「念仏車」と呼ばれる碑が立っています。茶乗りたちは、ここで一休みして「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながら道中の無事を祈り、その車を回したと伝えられています。

狛江から調布へ

かつて六郷用水に架かっていた「一之橋」のたもとに立つ「石橋供養塔」の側面に「東六合江戸道」と刻まれています。狛江銀座の三叉路を右に曲がって狛江市役所の前を直進します。狛江市をほぼ東西に縦断し、調布市国領に入ります。この矢崎から京王線国領駅までを鍋屋横丁といいますが、茶乗りたちは「八丁首なし」と呼んで、先を歩くものの首が見えなくなる位真っ直ぐな道が続いて、人家など一軒もなく、寂しい道だったそうです。鍋屋横丁を過ぎると甲州街道に突き当たります。調布の町に入ると街道の両側に遊女屋が散在していて、いっぺんに賑やかになります。茶乗りたちは、家並みの続く街道を府中の町に入って行きました。

府中から青梅へ

府中の町に入るとたいてい昼飯時になるので、茶乗りたちは馴染みの「万屋」などで腹ごしらえをしました。万屋は鳶屋とともに茶乗りたちの定宿でした。明治二十七年に青梅鉄道が開通し、停留場は立川、拝島、福生、羽村、小作、青梅、宮の平、日向和田の八つ。小さな客車が一両か二両、貨車の後ろに付いていました。

鉄道開設以前は、奥多摩街道を遡り、青梅からは青梅街道を真っ直ぐに帰って行きました。

文化の伝播者

過去三百年にわたって茶流しの行われた多摩川は、その水路自身が「茶の道」でもありました。交通路としての多摩川は、今ではまったく閑却されておりますが、それが歴史に果たした役割まで忘却することは許せません。

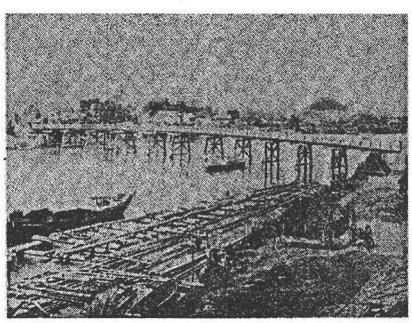
東京西南の地図を見ても東海道をはじめとして、ほとんど幹線道路は南北に走っています。それだけに多摩川に沿ってほぼ東西に伸びている「茶道」はうねうねと曲がりくねった細い道ながら流域の人々にとっては、生活の道、産業の道、情報の道として、かけがえのないものであったわけです。

奥多摩の村々は、山間部に属しながら、古来、江戸への木材供給という立場から中央の諸情勢には敏感に反応し、様々な情報が驚くべきスピードで伝達されております。茶乗りたちが一役買っていたことは申すまでもないことです。

多摩川が木材を運ぶパイプラインならば、茶乗りたちは、それを通じて都会の新しい空気や文化に触れ、それを村々に持ち帰った文化の伝播者で、山村文化の向上に果たした有形無形の働きは、わたしたちが想像する以上に大きなものがありました。

この記事は、明治末期から大正中期にかけての記述が中心になっています。

（取材　石渡、柏村、都築委員）



明治３０年頃の六郷橋と茶繋場

住み良い町へ
小林自治会

梅澤 喜代造

小林自治会の位置は、池上線蓮沼駅を北東の境として、南は環状八号線の少し南までが東矢口三丁目、そして新蒲田二丁目の一部が区域となっています。住居表示の改正で、小林町の名が現在のように変わりました。

戦前、松竹蒲田撮影所が華やかなりし頃は、田中絹代さんの住居があり、『酒は涙か溜息か』を始め数々のヒット曲の作詞で有名な作詞家の大御所、高橋掬太郎先生も住んでいた場所でもあります。お隣の安方南町会、西蒲田七丁目御園町会に挟まれた閑静を通り越して、むしろ寂しい位の所でした。ただ、東矢口三郵便局より南へ向かって多摩川に至る道路は、毎年10月11日には池上本門寺のお会式の万灯のお練り街道として、川崎方面からの信者が担ぐ万灯行列を見物しようとする近隣の人々で大変な賑わいを見せていました。

戦後は、地方からの移住者も多くなり、静かな町のたたずまいも一変しました。商店も増え、蒲田駅へは歩いて8分位、蓮沼駅へは2分位の近さで、アパートが数多く建ち、それに伴って空巣犯罪も増えてきました。親孝行な青年が、故郷の母親に仕送りしていたお金が、実は空巣で得たもので、池上警察署員に連行される青年の顔を見て何とも云えぬ気分になったのもその頃の事でした。

小林自治会も他の町会と同様に役員の協力で、防火防災、交通、防犯、厚生、婦人の各部が中心となり活動してまいりました。現在では世代の交替が進み、高層マンションが増え、入居する人達も様々な考えを持っています。最近では、警察でも手を焼く様な犯罪も多発してまいりました。自治会では従来からの活動は勿論、更に一歩進めた活動をと今年の4月2日より、蒲田西地区では最初に防犯パトロール隊を結成しました。毎週一回、町会の一部から八部までの役員が交替でパトロールをしています。更に、この輪を広げ、地域で協力頂ける方にも参加をお願いして、夜間だけでなく子供達の登下校時にも広げて、まさに住み良いまちづくりへと役員一同頑張って、息の長い活動を進めてまいりたいと願っています。

事務局からのお知らせ

「かまにし17」も今回で第13号を発行することになりました。今回から新しい編集委員さんが加わりましたので、紹介致します。

西蒲田女塚町会の勝俣幸子さん、小林自治会の星野定義さん、トミン多摩川二丁目自治会の橋本一弥さんです。これからも委員長共々、皆さんに親しまれる情報紙を作っていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

また、平成15年3月発行の第7号「わがまちの顔」でご紹介しました『町の歌手・とうふや源さん』こと藤浪源八郎さんが7月に急逝されました。ここに謹んでご報告し、ご冥福をお祈り致します。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，536人
	女	27，210人
	計	56，746人
世帯		29，292世帯

平成16年8月1日現在

編集後記

今回の「わがまちの顔」は、中学生の登場です。最近、話題の女子十二楽坊が流行する以前に、中国楽器の二胡を習い始めていたそうです。中西さんご一家には、二胡という楽器に何か特別なものを感じられたのではないでしょうか。桐子さんの今後の活躍に期待します。

特集は、「多摩川シリーズ」を取り上げてみました。今回は筏道を題材にしてみました。いかがでしたでしょうか。一度、筏道でも散歩してみてはどうでしょうか。これからも多摩川に関係するものを題材に、特集を組んでいく予定です。ご期待ください。

町会紹介は、小林自治会でした。地域の安全を守るために、皆さんで活動されていることに、頭の下がる思いがしました。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五